

## 第39回 高知女子大学看護学会報告

高知女子大学看護学会企画委員長 畦 地 博 子

### メインテーマ：看護を拓くナラティブ・アプローチ

第39回高知女子大学看護学会が、去る平成25年7月20日（土）に、高知県立大学池キャンパスで開催された。県内外の施設から、204名の卒業生・修了生、および看護職の皆様の参加をえて、活気ある学術集会となった。今年のテーマは、看護を拓くナラティブ・アプローチ。ナラティブ・アプローチは、看護はもちろん、医療、福祉、教育、ビジネスなど、様々な分野で20年近くにわたって注目され続け、今また脚光を浴びている。何故ナラティブ・アプローチは人を魅了し続けるのか、そして、今また何故ナラティブ・アプローチなのか、その正体を見極め、看護を拓くナラティブ・アプローチの可能性について見直したいと考え、このテーマを取りあげた。このテーマのもと、午前は、看護界のナラティブ・アプローチの第一人者、田中美恵子先生に「ナラティブ・アプローチの可能性」というテーマでご講演をお願いした。午後は、「聴き、語り、ともに考える」をテーマにワークショップを開催した。

### 学会長挨拶

講演に先立ち、野嶋佐由美学会長から、「看護を拓くナラティブ・アプローチ」というテーマは、永国寺キャンパスの階段教室で開催された第1回から、その時々課題を取り上げ、語り継いできた高知女子大学看護学会に相応しいと考えていることが語られ、挨拶があった。午前の田中美恵子先生の講演、また、午後のワークショップについて紹介があり、参加者に対し、本学術集会を通して、語り続ける力を磨き、語ることによって多くの人と体験を共有して、日頃の実践を見直す機会として欲しいことが述べられた。同時に、現在高知県立大学で、行われている大学院教育課程の再編についてふれ、今までの卒業生、修了生、および地域の看護職の皆様のお力添えに感謝が述べられるとともに、今後もかわらないご指導とご協力をお願いした

い旨述べられた。

### 来賓の挨拶

高知県看護協会会長 宮井千恵氏、高知県立大学学長 南裕子氏より、第39回高知女子大学看護学会開催のお祝いと今後の学会の発展への期待が述べられた。

### 講演会：10：00～12：00

東京女子医科大学看護学部教授 田中美恵子先生により、「ナラティブ・アプローチの可能性」というテーマで、約90分程度の講演が行われた。講演の内容については、本学会誌をご参照いただきたい。アンケートでは、「ナラティブの概論について整理が付き理解できました」「自分の考え、やってきたことを見つめ直し、さらに学びたいことが明確になりました」といった意見と同時に、「先生の研究についてもっと話がききたかった」といった意見がよせられていた。

### ワークショップ：13：30～15：30

今年は、「聴き、語り、ともに考える」をテーマに、「病と生きる人の語り」「認知症のケアを提供する人の語り」「地域での生活を支える人の語り」「看護師の語り」「発達障害を持つ子供の親の語り」の5つのワークショップにて、病者、家族、そしてケア提供者などの語りを共有し、日頃の実践活動を見直す機会とした。また、新たな試みとして研究方法を取り上げ、「研究方法としてのナラティブ・アプローチ」をテーマに、哲学領域の研究者吉川孝氏（高知県立大学文化学部准教授）と看護学領域の研究者中山洋子氏（高知県立大学DNGL教授）のおふたりによるワークショップを開催した。どのワークショップも盛況で、アンケートでは、「ナラティブを実感できた。興味深かった。その力強さも感じた」「とても良い語りを聴かせていただき、ナ

ラティブの大切さが実感できました」「パワーをいただきました」「語りの力や意味性の重要性について興味深く参加させていただきました」

などの意見がよせられていた。

ワークショップの詳細については、本学会誌をご参照いただきたい。